

卒業研究と現代中国学会賞

現代中国学会賞は、現代中国学部の「卒業研究」（論文、映像等）のなかで特に優れていると認められた研究に対して与えられる。最優秀の学会賞と優秀の努力賞があり、毎年、前者が1～3本、後者が8～10本選ばれ、卒業式において学長より授与される。

現代中国学部では、卒業予定者は全員が「卒業研究」4単位を取得しなければならない。この点が、全員必修となっていない法学部や経営学部などとは異なる。卒業研究は、本学部生にとっては、就職活動をようやく乗り越え、ホッとした気持ちの前に立ちふさがる卒業直前の最後の関門である。また教員にとっては、大学教育の総仕上げであり、しっかり勉強させて社会に出したいという親心の見せ場でもある。

選考の基準となるのは、テーマの選定、先行研究の把握、新たな資料の発見あるいは収集、論理の構成・展開、表現力などである。選出にあたっては、上記の選考基準に基づいて、まず現代中国学会の構成員である現代中国学部教員が、担当するゼミ生の卒業研究の中から優れたもの2点を卒業研究口頭試問後に推薦書を付して推薦する。次に各分野から選出された教員からなる学会賞選考委員会がそれらを検討して該当作品を内定し、教授会の承認を経て決定される。なお推薦された卒業研究はテーマ、内容によって言語文化コースと政経・国際コースに大別され、学会賞は原則として両者から均等に選ばれる。

これまで第1期生（1997年入学）から第8期生（2004年入学）までの間に選ばれたのは、学会賞が15本、努力賞が72本である。内わけは、卒業年2000年度に10本（学会賞3、以下括弧内の数字は学会賞数）、2001年度12本（3）、2002年度8本（2）、2003年度12本（2）、2004年度12本（1）、2005年度10本（1）、2006年度13本（1）、2007年度10本（2）である（「学会賞・努力賞一覧」参照）。

学会賞は、どれも力作、力作ぞろいである。またそれぞれにゼミ担当教員による推薦書が付されており、そこには研究に対する評価だけではなく、各執筆者の背景や作成の過程が記されていて興味深い。作品には、現代中国学部ならではの特徴が幾つかみられ、各ゼミの特色がよく表れている。

受賞作品については、以下のような特徴がみられる。

第1は、現代中国学部のカリキュラムの特色である「3現主義」や留学制度がよくいかされていることである。3現主義カリキュラムには、全員必修（中国人留学生を除く）の現地プログラムと選抜学生による現地研究実習（調査）、現地インターンシップがある。また留学制度には、学内推薦留学と私費留学があり、毎年10数名がこれを利用している。現中の学生であれば、これらのカリキュラムのどれかを必ず経験することになり、ほとんどを体験したという猛者もいる。これらの体験は、卒業研究におけるテーマ選定の大きな動機付けとなっており、その時の調査記

録や報告書を基にさらに論を深めた作品が少なくない。これらには、本人による第1次資料が含まれていることが大きな特徴であり、資料としての価値も高い。

現地研究実習(調査)を発展させた作品としては、「中国社区建設」(第2回上海、2002年度)や「中国観光産業とホテルマーケティング」(第5回廈門、2005年度)などがあり、現地インターンシップからは「中国女性現場労働者の現状と課題」(第3回北京、2006年度)、「広報とは」(第2回北京、2007年度)などが生まれている。

また留学における経験や調査をもとにした作品には、資料の収集やテーマの展開にかなりの時間をかけたことがうかがわれ、作品の完成度が高い。「中国の外食産業」(上海留学、2001年度)、「中国の環境問題の現状と課題」(天津留学、2001年度)、「日韓戦後補償問題」(ソウル留学、2001年度)、「台湾アイデンティティの誕生と形成」(台北留学、2001年度)、「中国研究の一現状」(2002年度)、「ワ族の宗教」(麗江留学、2005年度)、「日中〈家〉比較」(台湾留学、2005年度)、「中国におけるインターネット情報検閲」(北京留学、2007年度)、「中国・韓国・日本から見た黄砂認識の差異」(北京留学、2007年度)などがある。

第2は、母語以外の言語でまとめられた作品が複数あることである。日本人学生が中国語で書き、中国人留学生あるいは韓国人留学生が日本語を用いている。ほとんどが4万字を超えた量をこなしており、本人の熱い意欲が伝わってくる。

日本人学生による中国語の作品には、「中国的老齡化問題」「中国和日本的少年司法制度比較研究」(以上2000年度)、「日中婚姻観異同」(2001年度)、「中国二胡世界」(2004年度)、「関於日本與中国的結婚事情」(2006年度)などがある。中国人学生による日本語の作品としては、「中日同形異義語一覧」(2000年度)、「中国帰国者の異文化適応」(2001年度)、「中国の金融改革」(2004年度)がある。この中国人学生3名は、うち2名が名古屋大学大学院に進学し、1名は中国語の教師として活躍している。ともに卒業研究が彼らの進路の出発点となっている。

またこれらの作品については、本人の強い意思と努力は無論のこと、教員の熱心な指導も不可欠である。例えば「中国二胡世界」の筆者は、ゼミ授業を受けた2年間、ほぼ毎日、中国語で日記をつけて指導教授に提出し、中国語力のアップに努めた。教員も毎回時間を割いて丁寧に添削しただけではなく、この日記を通して日本人の日常生活や考え方を理解することができたとも語っている。このような課外の個別指導は、本学部における外国語教育の大きな特徴でもある。多くの語学担当教員が、授業とは別にかなりの時間と労力を割いて作文や発音の個別指導にあたっている。その結果、母語以外の言語による優秀な複数の卒業論文が作成され、外国語コンテストでの優秀者も輩出している。しかし近年、母語以外の言語による卒業研究の減少がみられ、残念である。

第3は、政経・国際コースを中心に、時代の動きに敏感に反応したタイムリーなテーマが多くみられることである。例えば、2000年度は一国両政や家電産業、2001年度はWTO加盟とIT産業、外食産業、2002年度は高度成長期における日中比較、社区と観光産業、2003年度は靖国問題、モバイル市場、日中貿易摩擦、モータリゼーション、2004年度はインターネット社会、金融改革、生態環境保護、2005年度は中国産農産物と日本の農政改革、2006年度は民族企業、砂漠化、教育格差、靖国問題、2007年度はインターネットの検閲、黄砂、民工などの問題がとりあげら

れている。これらのテーマは、この10年間の社会の断面を的確にとらえたものであると同時に、多くのテーマがなお今日的な問題でもあるため、問題の経緯と深層を考えるうえで貴重な資料を提供している。

第4は、作品に「個人」が強く表現されていることである。自身の〈歴史〉を背負い、強い動機と熱意をもって書きあげられたものがあり、感動的である。

例えば「中国帰国者の異文化適応」(2001年度)は、中国帰国子女である筆者が、自身や家族の日本帰国後の苦しい体験をふまえたうえで、さらに帰国者定住促進センターなどを訪れて数十名の帰国者へのインタビューも加え、普遍的なテーマにまとめあげたものである。また「日中消防」(2004年度)は、阪神大震災で被災し、助けられた筆者の「魂の叫び」(ゼミ担当者の言葉)ともいえるもので、筆者は、現在、東京消防庁で活躍している。

このほか各種のボランティア的活動から生まれた「フェア・トレードによるエンパワーメントとその背景にある南北格差」(2000年度)や「日中手話の比較」(2005年度)、「中国黄土高原における砂漠化」(2006年度)、祖父母に戦争体験をインタビューした「日本人と戦争」(2005年度)などがある。

また社会人入学生の卒業研究は、みな力作である。彼らは、量的には毎年数名にすぎないが、みな勉学に対して極めて真摯であり、日常生活の諸方面において若い学生たちの模範となっている。彼らの「中国コーポレート・ガバナンス」(2003年度)、「中国二胡世界」(2004年度)、「陳凱歌研究」(2007年度)は、熱意と気力に満ちており、人生に向き合う姿勢そのものに学ぶことが多い。特に、「陳凱歌」の筆者は、50代後半での入学という条件のもとで優秀な成績をおさめ、卒業研究が学会賞を受賞しただけではなく、卒業式では卒業生総代にも選ばれた。

第5は、政治、経済、法律、外交、歴史、文学、民族、言語、教育、ITなどテーマが広範囲で多彩であることである。これは、中国全体に関する専門家を擁した本学部の特徴を最もよく反映したものといえる。それぞれの研究には、各ゼミの特色が色濃くでており、学生が教員の指導のもとで着実に卒業研究を高めていった様子がみてとれる。卒業研究作成の王道といえる。

卒業研究は、テーマによって言語文化コースと政経・国際コースに大きく分けられる。このうち後者は、本数は全体の約3分の1と少ないが、テーマは特徴の第3で述べたように、時代をよく反映している。以下ではまだふれていない前者について紹介する。

まず本コースの言語部門については、「中日大辞典」編纂の伝統をもつ本学には言語研究の専門家がそろっており、比較的地味で複雑な当該部門において幾つもの優秀な卒業研究が提出されている。このうち「中国語における空間表現拡張プロセスの認知的分析」(2000年度)は、これまでの卒業研究のなかで最もすぐれたものの一つであり、筆者は現在、東京大学大学院博士課程生として研究者の道を歩んでいる。このほか「中日同形異義語一覧」(2000年度)、「漫画ドラえもん擬声語・擬態語小辞典」(2001年度)、「否定表現〈～ない〉の研究」(2002年度)、「現代中国語文法における〈把〉構文について」「〈ノダ〉について」(以上2003年度)、「〈知る〉と〈わかる〉の違い」(2004年度)などがある。また語学の教材開発についても「中国語会話の授業におけるマルチメディアの活用」(2003年度)や「中国語母語話者を対象とした漢字教材の開発」(2007年度)など、意欲的な試みが提案されている。

文学部門では、学生が本を読まなくなったといわれて久しいなか、抽象的で、頭と心を使わなければならない当該部門において、現代文学を研究するゼミを中心に力作がそろっている。「張愛玲『傾城の恋』について」(2000年度)、「20年代上海都市文学」(2001年度)、「『秋夜』を見る」(2002年度)、「郁達夫論」(2005年度)、「〈帰り道〉はどこにあるのか」(2006年度)、「村上春樹のなかの、もう一つの中国」(2007年度)などがある。

歴史部門には、日文、中文の多量の資料を読みこなし、テーマに正面から取り組んだ重厚なものが多い。「大連における〈廃娼運動〉とは何だったのか?」「文化大革命後の中国」(以上2002年度)、「中国近代史における軍閥化と袁世凱がもたらした影響について」(2003年度)、「隋から唐へ」(2004年度)、「中国におけるアヘン蔓延の経緯」(2006年度)、「北京紫禁城の役割」(2007年度)などである。このうち廃娼運動および袁世凱の2人の筆者は、大学院に進学してさらに研究を深めている。

映画や音楽、漫画などを通して異文化や歴史認識を分析するという研究は、学生に人気が高い。「漫画を通じて見る日中戦争」(2001年度)、「満州映画協会」「少年倶楽部」のみた中国」「アジアポップカルチャー」(以上2004年度)、「〈日本語族〉の深層(映画『多桑/父さん』)」(2007年度)がある。

ゼミ独自の、あるいはゼミ教員の指導による現地調査も一連の成果を生み出している。短期のフィールドワークによるため皮相的であるという欠点はあるものの、現地で第1次資料を得るといった経験は学生にとって貴重である。「ハニ族の宗教職能者」(2000年度)、「雲南省西双版纳のタイ族の住居」(2001年度)、「〈観光文化〉への検証」(海南島のリー族)(2002年度)、「ハニ族の食生活における伝統と変化について」(2003年度)、「草原の生態環境保護」(甘粛省甘南チベット族)、「台湾における対日感情考察」(2004年度)、「ワ族の宗教」(2005年度)、「少数民族における教育格差」(雲南省のリス族とナシ族)(2006年度)、「〈日本語族〉の深層」(台湾)(2007年度)などがある。

以上のように、学会賞の卒業研究は中国の各分野にわたっており、多彩である。共通点としては、明確な執筆動機をもっていること、自分の言葉で語られていること、強い意志と熱意があふれていることなどがあげられる。特に、動機付けにおいては現代中国学部の多様なカリキュラムが大きな効果をあげているといえる。しかし残念なことは、近年、本学学生は全体にまじめではあるが受身的姿勢が強く、卒業研究にもその傾向があらわれていることである。母語以外の言語で書かれた作品が減少していることは、その現れの一つであろう。学生の変化に対応し、彼らの優れた点を伸ばすための指導と意識の改革が教員側にもとめられていることを感じる。

【選考委員】

- ◇2000年度 ● 言語文化コース 内山俊彦 黄英哲 中川裕三 松岡正子
政経・国際コース 今井理之 加々美光行 (委員長) 古森利貞
- ◇2001年度 ● 言語文化コース 安部 悟 藤森 猛 劉柏林
政経・国際コース 河辺一郎 服部健治 山本一巳 (委員長)
- ◇2002年度 ● 言語文化コース 木島史雄 松尾肇子 吉川 剛
政経・国際コース 小田川圭甫 河辺一郎 嶋倉民生 (委員長)
- ◇2003年度 ● 言語文化コース 中川裕三 松尾肇子 木島史雄
政経・国際コース 今井理之 (委員長) 砂山幸雄 馬場 毅
- ◇2004年度 ● 言語文化コース 木島史雄 顧明耀 黄英哲 松尾肇子
政経・国際コース 砂山幸雄 (委員長) 河辺一郎 古澤賢治
- ◇2005年度 ● 言語文化コース 梅田康子 顧明耀 中川裕三
政経・国際コース 小田川圭甫 古澤賢治 三好 章 (委員長)
- ◇2006年度 ● 言語文化コース 高明潔 佐野俊彦 劉柏林
政経・国際コース 高橋五郎 服部健治 (委員長) 三好 章
- ◇2007年度 ● 言語文化コース 高明潔 薛 鳴 吉川 剛 (委員長)
政経・国際コース 高橋五郎 服部健治 山本一巳

【学会賞・努力賞一覧】

◇2000年度

氏 名	賞別	テ ー マ	指導教員
飯田恭子	学会賞	中国家電産業の現状と展望	今井理之
加納希美	学会賞	中国語における空間表現拡張プロセスの認知的分析 — “上” “下” を中心に—	中川裕三
脇野ますみ	学会賞	一国両制の中の法律問題—イギリス居留権、香港居留権の変遷—	緒形 康
大井亜伊子	努力賞	中国的老齡化問題	張 琢
太田 恵	努力賞	中国繊維産業の展望—21世紀の繊維強国に向けて—	緒形 康
岡本留美子	努力賞	フェア・トレードによるエンパワーメントとその背景にある南北格差	山本一巳
小山裕加	努力賞	張愛玲『傾城の恋』について	安部 悟
西尾憲太郎	努力賞	哈尼族の宗教職能者 —雲南省紅河哈尼族彝族自治州元陽県勝村郷全福庄を事例として—	松岡正子
安田浩子	努力賞	中国和日本的少年司法制度比較研究	郭 翔
孫 焱	努力賞	中日同形異義語一覧	今泉潤太郎

◇2001年度

氏 名	賞別	テ ー マ	指導教員
大坪千晴	学会賞	中国の外食産業—中国のファーストフード業台頭と発展—	緒形 康
栗田 諭	学会賞	漫画ドラえもん擬声語・擬態語小辞典	今泉潤太郎

水野真言	学会賞	台湾アイデンティティの誕生と形成	服部健治
伊藤千夏	努力賞	雲南省西双版纳の傣族の住居 —雲南省西双版纳傣族自治州勐海県の事例をもとに—	松岡正子
壁谷基子	努力賞	「旅」の観点から見る異文化	藤森 猛
佐々木洋明	努力賞	中国の環境問題の現状と課題 —天津のケーススタディーを含めて—	小田川圭甫
趙彦民	努力賞	中国帰国者の異文化適応	古森利貞
丹羽佑介	努力賞	漫画を通じて見る日中戦争—日中漫画の戦争役割—	高橋五郎
古田晋也	努力賞	日韓戦後補償問題	古森利貞
三輪泰子	努力賞	日中婚姻観異同	劉柏林
向川俊浩	努力賞	中国の WTO 加盟と IT 産業に与える影響	今井理之
渡部玲子	努力賞	20年代上海都市文学—『春風沈酔の晚上』と『上海』から—	安部 悟

◇2002年度

氏 名	賞別	テ ー マ	指導教員
新井菜摘子	学会賞	否定表現「～ない」の研究	山本雅子
湯原健一	学会賞	大連における「廃娼運動」とは何だったのか？	三好 章
岡村慈恵	努力賞	「観光文化」への検証 —海南島フィールドワークによる黎族の事例に基づいて—	高明潔
金森恭太	努力賞	高度経済成長期における中日比較	小田川圭甫
小池敦子	努力賞	「秋夜」を見る—視覚でとらえた「秋夜」—	安部 悟
高島麗子	努力賞	中国社区建設—以上海為例—	張 琢
田尻千晶	努力賞	中国教育の一現状	馬場 毅
安原義尚	努力賞	文化大革命後の中国 —巴金「随想録」とそれをめぐる新聞・雑誌記事から見る現代中国—	加々美光行

◇2003年度

氏 名	賞別	テ ー マ	指導教員
田畑 篤	学会賞	現代中国語文法における“把”構文について—“把”構文の述語動詞にアスペクト助詞“過”が用いられた文法形成について—	中川裕三
長谷川 大	学会賞	真宗の戦争責任清算と問題が先送りされ続ける靖国神社の比較的考察	河辺一郎
青木沙弥香	努力賞	日本人にとっての「白」とは —中国における「白」との比較のなかで—	劉柏林
石原雅子	努力賞	中国のモバイル市場—携帯電話小靈通—	古森利貞
小林恵理子	努力賞	哈尼族の食生活における伝統と変化について	松岡正子
野口 武	努力賞	中国近代史における軍閥化と袁世凱がもたらした影響について	馬場 毅
長谷川泰子	努力賞	日中貿易摩擦	今井理之
毛利正明	努力賞	中国コーポレート・ガバナンス	加々美光行
望月信太	努力賞	中国語会話の授業におけるマルチメディアの活用 — Visual Basic を使った授業支援システムの構築—	土橋 喜
八木梨絵	努力賞	「ノダ」について	山本雅子
矢島琢真	努力賞	中国のモータリゼーション —しのぎを削る欧米・日本自動車メーカー—	山本一巳
山下怜子	努力賞	漢語諸方言における飲食動詞の分布	山本雅子

◇2004年度

氏名	賞別	テーマ	指導教員
久保田智美	学会賞	満州映画協会	馬場 毅
伊藤ひろみ	努力賞	中国二胡世界	張 琢
伊藤深雪	努力賞	「知る」と「わかる」の違い	山本雅子
加藤重矢	努力賞	中国と日本における葬儀	加々美光行
五藤友佳	努力賞	『少年倶楽部』のみた中国	三好 章
呉越宏	努力賞	中国の金融改革	山本一巳
中田美佐	努力賞	草原の生態環境保護—甘肅省甘南チベット族自治州の事例から—	加々美光行
林 三代	努力賞	隋から唐へ—煬帝と太宗—	馬場 毅
古川ゆみ	努力賞	台湾における対日感情考察	黄英哲
溝口泰平	努力賞	日中消防—消防で切り拓く日中関係—	古森利貞
宮田裕之	努力賞	安全なインターネット社会を実現するための国際的取り組みに関する考察	土橋 喜
山川佑子	努力賞	アジアポップカルチャー—韓流と王家衛—	藤森 猛

◇2005年度

氏名	賞別	テーマ	指導教員
稲畑恵美	学会賞	佤(ワ)族の宗教—首狩りの衰退と現在— (雲南省思茅地区西盟ワ族自治県岳宋郷班師村を事例として)	松岡正子
青木友子	努力賞	現代中国における女性の生き方 —就業問題から考察する女性の社会地位—	砂山幸雄
石井瑠美	努力賞	中国観光産業とホテルマーケティング	今井理之
栗田飛鳥	努力賞	日中「家」比較	加々美光行
小池美帆	努力賞	日本人と戦争	三好 章
阪本恵美	努力賞	郁達夫論	安部 悟
杉田佳子	努力賞	日中手話の比較	藤森 猛
鈴木和哉	努力賞	自殺の日中比較—デュルケム『自殺論』と現代日本・中国—	山本一巳
丹島智美	努力賞	中国産農産物と日本の農政改革	今井理之
中村 礼	努力賞	中国の農民は二等公民なのか	吉川 剛

◇2006年度

氏名	賞別	テーマ	指導教員
山田英貴	学会賞	中国民族企業からみた中国企業経営の現状と課題 —「伊利」と「蒙牛」をケーススタディーとして—	小田川圭甫
市川明子	努力賞	占領下の国家神道政策の功罪	砂山幸雄
漆原舞子	努力賞	少数民族における教育格差—雲南省のリス族とナシ族を事例として—	松岡正子
大弓亜希子	努力賞	関於日本與中国的結婚事情	劉柏林
北川裕子	努力賞	中国の携帯電話	藤森 猛
楠 桃子	努力賞	中国女性現場労働者の現状と課題	松岡正子
鈴木沙耶	努力賞	旗袍の変遷にみる女性解放	三好 章
高岡晃士	努力賞	オロチョン族の生活・信仰	高明潔
田中元規	努力賞	フリーペーパーの現代社会における生存競争とこれから	今井理之

橋本耕太	努力賞	中国黄土高原における砂漠化	藤森 猛
矢野志奈	努力賞	東アジアにおける野球の定着	小田川圭甫
藪谷枝梨子	努力賞	中国におけるアヘン蔓延の経緯	馬場 毅
若生絵理子	努力賞	「帰り道」はどこにあるのか—残雪『帰り道』を読む—	安部 悟

◇2007年度

氏 名	賞別	テ ー マ	指導教員
神谷 敦	学会賞	中国におけるインターネット情報検閲—その政策と技術、そして展望—	土橋 喜
金津吉和	学会賞	陳凱歌研究 人と作品—揺れ動く歴史の中で—	藤森 猛
宮本恵美子	努力賞	村上春樹のなかの、もう一つの中国	砂山幸雄
榊原大輔	努力賞	中国・韓国・日本から見た黄砂認識の差異 —黄砂対策の問題点と中国東北部への進出を加速する日本企業への提言—	山本一巳
尾松亜美	努力賞	新聞広告で見る、日本人の抱く中国イメージの変遷 —雑誌広告に着眼して—	河辺一郎
福井茉莉子	努力賞	広報とは—中国における外資企業を例として—	服部健治
加藤栄子	努力賞	「日本語族」の深層 —映画『多桑 / 父さん』と台湾人のアイデンティティ—	黄英哲
番場仁子	努力賞	中国語母語話者を対象とした漢字教材の開発	梅田康子
児島由佳	努力賞	民工とその子女をとりまく環境—教育に焦点を当てて—	砂山幸雄
富永奈緒美	努力賞	北京紫禁城の役割	馬場 毅